

講 演

池田提言の歴史的意義と今後の日中関係  
— 日中国交回復三十周年記念 —

劉 徳 有

きょうは、お招きにあずかり、池田名誉会長が創立なされた、内外に名を知られる創価大学でお話をする機会に恵まれましたことを大変光栄に存じます。お招きくださいました若江学長ならびに創価大学の皆さまに心から感謝いたします。

冒頭から私個人のことを申し上げて大変恐縮ですが、今から30数年前、私は中国の国营通信——新華社と光明日報の東京駐在特派員をしております、取材のため2、3度ばかり創価大学を訪問させていただいたことがございます。あれからすっかりご無沙汰いたしました。創価大学は私にとって常に親近感のある日本の大学であります。

なぜなら、この大学は、中国と特別親しい関係があるからでございます。おそらく創価大学は日本で一番早くから中国の留学生を受け入れてくださった大学ではないかと思えます。現在でも、中国の多くの留学生がお世話になっておりますが、創価大学を卒業した中国の留学生は、今では中国の政府機関はじめ、社会主義建設の各分野で活躍しております。

また、創価大学のキャンパスには、私どもが尊敬してやまない周恩来総理ご夫妻を記念するために植えられた桜の木——“周桜”と“周夫婦桜”が、中日友好を象徴して、毎年春に、美しい花を咲かせているとうかがっております。

さきほど、キャンパスに着きましたら、“周桜”“周夫婦桜”のもとで、熱烈な歓迎を受けました。また、本部棟の玄関口でも皆さまの熱烈な歓迎を受けました。どちらの歓迎も中国語で、一瞬、私は、ここは北京なのかと錯覚をしたほどです。若江学長や居並ぶ関係者の皆さまの顔をあらためて確認し、ここはまぎれもなく、東京であり、私は八王子の創価大学に来ていることがようやく確認できた、そのような感じがしたものです。このような素晴らしい大学で、すぐれた先生方のご指導をうけて勉強されておられる学生の皆さまは大変幸せであり、うらやましい限りであると言わざるを得ません。

はからずも、このたび、私は創価大学の名誉博士の称号を授与されるという、まことに身にあまる光栄に浴することになりましたが、まるで夢のようでございます。

また私の糟糠の妻には、創価女子短期大学の榮譽賞を授与していただきました。これによって、創価大学は私にとりまして、さらに一段と身近な存在となりました。さらに、このように教職員バッジを胸に付けていただきました。本日、創価大学に“入学”でき、私は心から喜んでおります（拍手）。

ここにおられる先生方に今後とも引き続き、ご指導を願い、学生の皆さんとは何でも話せる友人になりたいと思えます。どうぞよろしく願います。

中国では何でも話せる友人のことを「諍友」と言います。これは日本語にはないものです。日本では義友とか親友と言うようですが、「諍友」という言い方はないようです。これは言い争う友という意味ではありません。何でも話れる、腹を割って耳の痛いことも言い合える、そういう間柄を「諍友」と言うのです。皆さんと、そうゆう友人になりたいと思います（笑い、拍手）。

今、私はここに立って、池田名誉会長が中日友好の発展のために幾度となく提唱なされた“金の橋”という言葉の思い起こしています。現在、中日両国人民の心に架けられた“金の橋”を行き交う人がますます繁くなっていることを、皆さまとともに喜び合いたいと思います。

### 戦争状態に終止符打つ国交樹立

さて、ご承知のように、今年は中日国交正常化30周年にあたります。国交正常化、つまり国と国が国交を結ぶということは、至極当然のことですが、第2次大戦終了後の冷戦構造の国際情勢の中で、中国と日本の国交回復は非常に大変なことでありました。

歴史を振り返ってみますと、1949年に新しい中国、中華人民共和国が成立し、中国人民は自分の運命を自分で決める新しい権力を打ち立てましたが、アメリカは中国を認めないばかりか、いわゆる“封じ込め政策”をとり、新しく生まれた中国をみどり児のうちに圧殺しようとししました。明らかに、このような中国敵視政策は、歴史の大きな流れに逆らうものであったことは言うまでもありません。

一方、田中内閣以前の戦後歴代の日本政府は、アメリカに追随して、すでに打ち倒された中国の旧政権にしがみつき、新生の中華人民共和国を認めようとしませんでした。

今から30年前の72年になって、国際情勢が変化し、中日両国人民の長年の努力が実り、両国首脳が決断によって、その年の9月29日に北京で中日共同声明が発せられ、それまで中日両国の間に法的に存在していた戦争状態が終結し、国交の樹立が宣言されました。

さきほど、両国人民の長年の努力と申し上げましたが、日本におきましては、当然、創価学会の皆さまの並々ならぬご努力がその中に含まれています。なかでも、池田大作名誉会長の果たされたご貢献は大きく、ここで特に触れさせていただきたいと思います。

しかし、その前に、私が最初にどのようにして創価学会の幹部の方と接触をしたかについてお話したいと思います。

それは確か、私が日本で特派員をしていた66年の夏のことだったと記憶しています。もちろん国交が回復される前のことです。

ある日、東京で作家の有吉佐和子氏に会いましたら、思いがけず「日本に創価学会というとても真面目な団体があります。学会の中には若い方が大勢いらっしゃって、誠実で真面目な人ばかりです。彼らと会ってみる気はありませんか？」と言われました。

有吉氏とは60年代の初めごろからの知り合いで、氏の小説『祈祷』を翻訳したこともあるので、懇意にしておりましたが、その有吉氏の話聞き、私は同僚の中国記者と相談し、せっかくの機会なので会ってみようと思いました。しかし、当時はまだ創価学会の実態を十分に知らなため、やはり慎重な態度をとるべきだとも考え、覚書貿易弁事処首席代表の孫平化氏の指示を仰ぐことにしました。場所は、伝通院の近くにあった私どもの宿舍兼事務所でした。

### 孫平化氏 学会との接触は渡りに船と

私の報告を聞き、孫氏は「周総理から創価学会の幹部と接触するようにと指示を受けている

が、今その機会を探しているところだった。渡りに船だ。ちょうど良かったじゃないか」と言われました。

実は、60年代初期、孫平化氏が日本訪問から帰国した後、周総理に仕事の報告をした際、周総理は二つの事柄をととても重視したと聞いています。一つは、大都市の立体高速道路の建設によって、交通渋滞が緩和されていることで、もう一つは、勃興しつつある創価学会のことでした。創価学会について、周総理はいくつかの質問をされましたが、その場に居合わせた人はどれもわからず、満足できる回答は得られませんでした。そこで周総理は、大衆の中で大きな影響力を持つ創価学会を無視してはならない、速やかに創価学会の幹部との接触を図れと指示をされたと聞いています。

有吉氏の肝煎りで、孫平化氏と私、それに『大公報』記者の3人は、66年の7月、東京港区にある八芳園で当時青年部長を務めておられた秋谷栄之助氏（現会長）と、もう二人の青年幹部に会いました。有吉氏も同席されたことは言うまでもありません。

美しい庭の見える座敷に向かい合って座り、秋谷氏ら3人が皆若くてとても印象的でした。席上、どんな話をしたか、すでに忘れてしまいましたが、ただ一つだけはっきり覚えているのは、初対面で慎重になったせいとか、お互いに失言を恐れて実質的な問題に触れなかったということです。相手の真意を知りたかった双方にとっては、何かを話すより、対面そのものが重要だったとも言えます。中国の日本駐在の代表と特派員にとって、創価学会の幹部と会うのはこれが初めてではないかと思います。

後に、秋谷氏から直接聞いた話ですが、中国の私どもと会見する件について、秋谷氏も事前に当時の池田大作会長の指示を仰いだそうです。秋谷氏の話によりますと、「1966年6月下旬のある日、有吉佐和子さんから電話があった。彼女は『17日に池田会長にお目にかかりました。お話をさせて頂いたところ、中国を訪問したいとの意向をうかがいました。そこで、私は友人の「光明日報」の記者、劉徳有さんとL T貿易事務所の孫平化さんに創価学会の幹部を紹介したいと言いましたが、彼らから会いたいという返事をもらいました。創価学会の方はいかがでしょうか?』と言った。すぐに池田会長の指示をうかがったが、会長は『これは日中友好を深める重要な機会です。君は何人かの幹部と一緒に彼らに会ってください』と同意された」そうです。

このように、池田大作会長は、中日国交回復以前の早い時期から、中日関係改善について、すでに強い関心を持っておられたのです。

秋谷氏にお目にかかった2年後の68年9月8日、つまり中日国交回復の4年前に、池田大作会長が日本大学講堂で開かれた創価学会第11回学生会総会において1万数千名の出席者に向かって演説をされ、その中で、中国問題と日中関係に触れて、極めて重要なポイントを指摘されたことを、夕刊とテレビのニュースで知りました。演説の全文は、その後受け取った『聖教新聞』で知りましたが、中国問題と中日関係について、池田会長は3つの柱を立ててお話されたことが、今でも鮮明に記憶に残っています。

### 池田会長——複雑な情勢下で勇氣ある発言を

第1は、日中国交正常化についてであります。

池田会長は、演説の中で、戦後日本の自民党政府が一貫して対米追従主義に終始してきたことに触れた後、「日本も独立国である以上、独自の信念をもち、自主的な外交政策を進めていくのは当然の権利であります」と日本のとるべき立場を強調されて、次のように言われました。

日本政府は、52年に台湾との間にいわゆる「日台条約」なるものを結んで「日中講和問題」が解決されているとしているが、これは中国を無視した「観念論」にすぎない。日中国交正常化の対象の実体は、中国の民衆であり、「それを無視して単なる条約上の“大義名分”にこだわり、いかに筋を通したと称しても、それはナンセンスであるといわざるをえない。現に、周恩来をはじめ、中国の首脳は、一貫して中国と日本との戦争関係はまだ終結をみていないとの見解をとっている。このままの状態では、いくら日本が戦争は終結したといっても、円満な国交関係が実現するわけがない。したがって、なんとしてでも、日本政府は北京の政府と話し合うべき」であり、「中国政府の存在を正式に認めること」を強く主張し、明確に日中両国の首脳会談を提唱されました。

第2は、国連における中国の合法的権利の回復であります。

池田会長は、日本はアメリカに加担することなく、「北京の国連での代表権を積極的に推進すべき」であると主張されました。

第3は、広く経済、文化交流を推進することにあります。

池田会長は、演説の中で、中国の打ち出した「政治三原則」と「貿易三原則」に言及して、「(日中貿易は)日中両国の相互理解のうえに初めて成り立つものですから、中国側の主張を一方的に無視して考えるわけにはいかない」と指摘し、アメリカに追従することをやめ、日中貿易の発展を妨げる「吉田書簡」の廃棄を主張しました。

吉田書簡というのは、吉田茂首相が台湾の蒋介石の秘書に宛てた書簡で、その中には、日本と中国との間で行われている貿易に対して、輸出入銀行などによる長期の政府資金を使用しないなどといったことが書かれてありますが、これは、まったく私的な書簡であります。ですから、この「吉田書簡」の廃棄を主張されたのです。

そして、最後に、池田会長は、「今こそ日本は、この世界的な視野に立って、アジアの繁栄と世界の平和のため、その最も重要なかなめとして、中国との国交正常化、中国の国連参加、貿易促進に全力を傾注していくべきである」と強く聴衆に訴えられました。

私は特派員として、当然ながら、早速、この講演の要旨を本社に打電しました。

### 歴史は“提言”の先見性を証明

30数年前の池田会長のこの提言は、今、見れば、ごく普通であるかもしれません。しかし、当時の複雑な状況のもとで、このような大胆な提言をするには、危害を加えられる覚悟をしなければならぬほど、大変に勇気が必要であり、容易なことではありませんでした。

そればかりでなく、池田会長の提言が中日関係のその後の発展に極めて大きな意味を持っていたことは、時間がたつにつれて、ますます、はっきりしてきています。なぜなら、当時の佐藤内閣は、どこまでもアメリカに追随し、中国を敵視する政策をとり、国交を正常化する意欲をまったく持っていなかったばかりか、極力、中国の国連での合法的議席の回復を妨げ、「二つの中国」をつくる陰謀に加わっていたからであります。

池田会長が提言で予見されたことは、その後の世界情勢と中日関係の発展によって見事に証明されました。3年後の71年7月、公明党代表团が中国を訪問し、中日友好協会と共同声明を発表して明確に中日復交五原則を提示しました。池田会長の提言の三つの柱があったからこそ、この五原則は提示されたと思えます。そして、10月に、中国は国連での合法的議席を回復し、翌年——つまり、30年前の72年9月に、中日国交正常化が実現したのであります。

思えば、30数年前、中日国交がまだ回復を見ないときに行われた池田大作会長の提言は、日

本国民の日中両国の友好に対する願望を反映し、歴史の潮流に合致する先見の明のあるものであったと言えます。

私は若い時、日本に特派員としてくる前にたびたび周総理の通訳をしたことがありますが、周総理は常に、「水を飲むとき、井戸を掘った人を忘れるな」と言って、中日友好のために尽くされた日本の友人の業績を称えられました。国交回復後の74年5月、池田大作会長は初めての中国訪問を実現し、そして12月に再び中国を訪れられた時、周総理は病気を患って、また鄧小平副総理が、中日関係の回復と発展のために大きな貢献をされた日本の重要な「井戸掘り人」、池田大作会長と会見したのであります。

今年は、中日国交正常化30周年ですが、同時に、中日民間交流の50周年にもあたります。というのは、民間交流は国交回復より、さらに20年早く、52年の第1次貿易協定調印から始まっていたのです。この50年間、中日関係は確かに大きな変貌を遂げました。私自身、この変化の中に身を置いてきましたが、50年前をふりかえると、当時の中日関係はまだ民間の往来に限られておりましたが、双方の努力によって、中日関係は当初の小さな“せせらぎ”から、今日のような滔々たる歴史の潮流に発展しました。当事者の一人として、まことに喜びにたえません。

### 共同の繁栄を今、模索する時

しかし、中日関係の中で、20世紀に発生し、本来なら国交回復時の『中日共同声明』によってすでに解決済みであるはずなのに、まだ徹底的に解決されないまま残されているいくつかの問題、たとえば日本の一部に見られる“歴史認識”の問題や台湾に対する煮え切らない問題が存在することも否めない事実であります。

これらの問題は21世紀に持ち越さざるを得ず、そのため、中日両国が21世紀に向けて平和と発展のための友好協力パートナーシップを構築するのに、不安定で予測しがたい要素が加わっております。こうした問題を解決し、偶発的あるいは突発的な要素が中日関係の大局に副次的な作用や破壊的な結果をもたらすことを避け、中日関係の各分野でバランスのとれた協調性を保ちながら、共同の繁栄を求めていくためには、どうすべきかを真剣に考える時がすでに来ているように思われます。

私に言わせれば、平和、発展、友好、協力こそ、中日両国人民の共通の願いと目指すべき目標であると信じます。この目標実現のためにどうすれば良いのでしょうか？ 私の考えを少しばかりまとめてみました。

第1に、国交回復時の原点に立ち返ることが肝要であります。原点とは、『中日共同声明』『中日平和友好条約』『中日共同宣言』であり、言うまでもなく、これらの基本文献は、両国関係の政治的基礎であり、厳守すべきものであります。

中日関係の中で、歴史について、特に近代史について正しい認識を持ち、正しい歴史観で両国の若い世代を教育することが大事であると思います。

歴史認識の問題で、日本人は中国人に対して、もうすでに謝っているのに、中国人はことあるごとに“歴史認識の問題”を持ち出す、何回謝ったら気がすむのか、といった議論が日本にあるようです。

中国には、日本にいつまでも繰り返し、繰り返し謝らせるという考えはありません。問題は、その歴史問題に対してハッキリした態度をとるか否かにあるのです。

これに関連して、あることを思い出しました。それは、60年安保の年に野間宏氏らの日本文学代表団の一行が中国を訪問し、当時の陳毅副総理と会見した時のことです。私はその時、通

訳として、同席しておりましたが、日本軍のかつての中国侵略に話が及んだ時、陳毅副総理は、それはもう過ぎ去ったことだ、過ぎ去ったことは過ぎ去ったことにしましょう、と言いました。

すると、野間氏は、いいえ、日本人としては忘れることはできません、と言いました。陳毅副総理はハタと膝を打って、その通り、日本人は忘れないと言い、中国人はこれはもう過ぎたことだと言って、初めて真の友情が生まれるのだ、と言いました。私は、前提はあくまでも加害者としての日本がその歴史を忘れず、ハッキリした態度をとることだと思えます。

これが中国の言う“前事を忘れざるは、後事の師なり”という言葉の意味するところであり、中国人は決してことあるごとに日本人に対し、謝らなければならないと言っているわけではありません。

第2は、相互理解と相互信頼を強めることがいかなる時期よりも重要になってきていると思えます。

そのために、両国間の文化交流と学術交流をもっともっと盛んにすべきことを提案いたします。

文化交流は魂の交流であり、両国人民の心と心に友好と相互理解の橋を架けるプロジェクトであります。私たちの交流は、ムードづくりにとどまってはならず、心を開き、腹を割った、魂の触れ合いでなければならないと思えます。

中日両国は、確かに文化的に多くの共通点を持っていますが、同時に「相違」が存在することも率直に認めるべきではないでしょうか。ある意味で、中日文化は、「異文化」なのです。

中日文化の相違点について最近の例を一つ挙げてお話ししてみましょう。これは実際にあった話です。

日本のあるプロデューサーが中国と協力して、合作のテレビドラマをつくることになり、中国から俳優たちが日本に来ました。ロケの最中、お昼になると弁当が配られ、それを2、3日続けて食べた中国の俳優たちは大変不満に思いました。

どうして毎日冷たい飯ばかり食わせるのか、日本に来てまで冷遇されるつもりではなかったというわけです。なかには、ストライキをやるというものまで出てきました。そう言えば、中国もこのところ、能率的ということで、弁当がはやっていますが、おかずもご飯も温かい点が日本と違うようです。もちろん日本にもホカホカ弁当はありますが、このトラブルを知った中国大使館の文化参事官は、わざわざ現場へ行って、俳優たちに、日本では弁当は冷たいのが常識であり、日本人スタッフも同じように弁当でお昼を済ませている事情を説明し、他方、日本側にもタマゴをおとした熱いおつゆを追加してもらって、この問題を丸く収めたそうであります。

### 異文化を認める中に真の理解が

次に民族的な感情や心理状態を映し出す文学作品、俳句を通して、両国の文化の違いを見て取ることができます。

日本の伝統的俳句は“季語”が要求されますが、漢詩にはそういうことは要求されません。俳句の“季語”の果たす暗示、連想、象徴、比喩などの役割および文化的背景を理解しなければ、俳句を本当に理解し、味わうことは難しいと思えます。

日本では、「一句を活かすも殺すも季語次第」と言われているようですが、中国人にはいまひとつピンとこないようです。

例えば、正岡子規の名句「柿くへば鐘が鳴るなり法隆寺」ですが、中国の大変有名な日本文

学研究者の李芒先生は名訳「方啖一顆柿、鐘声悠婉法隆寺」を発表されております。しかし、中国の読者がこれを読んで、まず疑問に思うのは、なぜ柿を食べたら法隆寺の鐘が鳴ったのか、リンゴではいけないのか、ということでもあります。

日本人なら、この句からだんだん深まっていく秋の気配を感じとり、そこからいろいろなことを連想するにちがいませんが、中国の一般の読者にそこまで理解してもらうのは無理かと思えます。

このような「相違」を認めてはじめて、相互理解を深め、心底から己を知り相手を知ることができ、そこから相互信頼も生まれてくると思えます。

第3は、中日両国は、長期にわたる経済協力関係を構築することが重要であります。

現在、中日経済協力関係は時には摩擦もありますが、総体的に順調に発展しています。日本は中国にとって最大の貿易パートナーであり、中国も日本にとって第2の貿易パートナーであります。

注目に値するのは、中国の対外経済のうち主要な四つの面で、日本が際立った位置にあるということです。すなわち、中日間の貿易額は中国の対外貿易の中で1位を占め、外資導入国のうち日本は最多投資額を記録したことがあり、中国が受けている外国の援助のうち日本の援助額が最も多く、外国からの技術導入のうち日本企業の対中技術輸出は上位にあるというのがそれです。私は、この良好な趨勢を今後も引き続き維持できるよう望んでいます。

私たちが21世紀の中日関係を展望する時、その基調となるのは経済協力関係でなければならぬと思えます。中日両国が密接な経済協力関係を築く際に、たとえ何らかの障害が存在する時があったとしても、私たちはむしろ巨大な潜在力と可能性がもたらされ得るという面の方を見るべきであります。

中日両国の間には、資源、資金、技術、市場などの面で大きな相互補完性と相互利益性があるのです。ハイテクや環境保全などグローバルな問題でも、両国はさらに協力を強化すべきであります。両国の経済貿易協力関係には、すでに良好な基礎があり、今後はこの関係をより一層発展させていかなければなりません。

ご承知のように、現在、中国は西部開発の大戦略を打ち出しています。これは21世紀の中日経済協力の領域をさらに広げるものであります。この面での協力には非常に大きな潜在力が秘められています。日本には、国土開発と地域開発などの面で成功を収めた多くの実績があり、それらは中国の西部開発に対し、大変に参考になるものと思えます。

中国は、改革開放後の20数年間、非常に大きな変化を遂げました。もちろん、多くの問題と矛盾を抱えておりますが、全体的に見て、中国経済はこれまでにない目覚ましい発展を遂げ、人民の生活は向上し、社会は安定しております。

そうしたなかで、時折、いわゆる「中国崩壊論」「中国脅威論」「中国経済脅威論」なるものを耳にします。

しかし、中国は日本にとって脅威になることはありません。また、中国は崩壊してしまうことも絶対にありません。

#### 一般庶民も実感する急速な繁栄

「中国崩壊論」を唱える一部の外国の学者は、「中国の国内総生産（GDP）成長率は水増しされており、中国の繁栄は虚構であり、投資環境も芳しくない。そのうちにきっと体制の崩壊を導くにちがいない」などと言っています。

しかし、20数年来の中国の改革開放が中国にもたらした大きな変化は、偏見を持たない世界の人々が等しく認めているところであり、中国経済の繁栄が虚構であるかどうかは、中国の一般庶民が自らの実感にもとづいてだれよりも一番よく知っているはずです。

また、中国の投資環境が良いか悪いかは、数十万にのぼる海外の投資者が一番発言権を持っていると思います。

この20年間、中国経済の持続的発展は確かに多くの外国のエコノミストの予想をはるかに超えるものでした。西暦紀元2000年の中国のGDPは、70年代の4倍に達し、2001年の中国経済の総量はアメリカ、日本、ドイツ、イギリス、フランスに次いで世界第6位を占めるようになりました。

しかし、GDPを一人当たりで計算すると、今の中国は日本の約40分の1です。つまり、日本人1人が働いた分は、中国人40人分に相当するのです。中国はまだまだ遅れております。総量は世界で6位でも、一人当たりで計算すると、114位に下がってしまうのです。したがって、中国は、これから大変な努力を傾けて、国の建設を続けていかなければなりません。

とはいえ、中国は確かに大きく変わりました。例えば、文化大革命当時のように、商品が極度に欠乏して、穀物、油など食料品や布を買うのにキップを必要とした時代はとっくに過ぎ去り、スーパーマーケットも20年前は中国全土に数えるほどしかありませんでしたが、いまでは全国の大中都市に行けば、どこにでも見られるようになり、市場に出回る商品も非常に豊かになりました。大都会では、すでにテレビが普及し、冷蔵庫の普及率は約80%、携帯電話の普及率は30%以上だと思えます。自動車も急速に増えました。90年、北京の車の保有台数は50万台あまりでしたが、2002年6月現在175万台となっています。しかし、これにはもうひとつの問題が起りました。道路が追いつかないのです。これは大きな悩みです。さらに、中国の絶対貧困人口の数も、この20数年の間に、2億5000万人から3400万人に減少しました。

中国の奥地には、まだまだ貧困人口がかなり残っており、これをなくするのに今後一層の努力が必要ですが、中国全体からみて、一般民衆はますますの生活から、次第に物質的だけでなく、文化的にもより質の高い生活へと向かっており、年4回ある“ゴールデンウィーク”（新年、春節、メーデー、国慶節）を利用しての国内旅行はもちろんのこと、東南アジアやヨーロッパなど海外旅行に出かけるケースも珍しくなくなりました。これなどは、私が60年代、70年代、日本で特派員をしていたころには、想像もできなかったことです。わずか20年の間にこれだけの成果をあげたのは、並々ならぬことだと思えます。

### 「中国脅威論」は根拠のない暴論

しかし、先ほど申し上げたように、中国は、国の建設のために今後もさらに努力しなければならないというのが現状です。他国を脅かすことは経済的に見ても、軍事的に見ても絶対にありえません。

ここで、私は一つのエピソードを紹介したいと思います。それは62年、池田会長も親交をもちたれていた松村謙三氏が、両国の関係改善のため中国を訪問され、周総理と会談された際のできごとです。

松村氏は会談のなかで、「中国はこのまま発展していけば、恐ろしく大きな国になります」と述べられました。通訳を務めていた私は、外交の大切な場であり、正確に訳さなければいけないという思いが強すぎたためか、「恐ろしい国になる」という個所を強調して周総理に伝えてしまいました。



これに対し、周総理は「中国はいくら巨大になっても、絶対に他国を侵略することはありません。中国は百年間外敵に侵略され、苦痛をなめてきました。そうした苦痛を他人に押しつけることは絶対にありません。中国の古い言葉に『おのれの欲せざる所を人にほどこすなかれ』とあります。中国は平和外交を遂行していきます」と語られたのです。私の通訳のまずさによって、とんだ方向に進んでしまったのですが、そのことで、周総理が中国の平和外交政策を説明された。日本でいう“けがの功名”であったと思います。

中国はこれからも平和を堅持していきます。したがって、お隣の日本も平和発展の道もこれからも堅持していただきたい、そのように願っております。

それでは、「中国経済脅威論」はどうかと言いますと、これもまったく根拠のないものです。

前に述べたように中国経済は、この20数年間、目覚ましい発展を遂げましたが、日本は依然として経済大国であり、中国は発展途上国であるというこの基本的事実は変わっていません。

日本は、「バブル経済」崩壊後の「失われた10年」という停滞を経験したことにより、中日両国の間に今現れている変化を比較して、これを「質的变化」と大袈裟に言う人が現れています。しかし、中国経済発展のレベルは、60年代前期の日本のレベルに相当するにすぎません。これが中国の現実なのです。

今、60年代と申しましたが、日本で特派員を務めていた時の観察によれば、日本は確かに60年代に内外の状況の変化に適応し、高い経済成長の奇跡をつくりだしました。しかし、その後、内外の環境に大きな変化が生じたため、日本の過去の一連の有効な制度、政策、措置と方法は思うように役割を果たせなくなり、多くの有利な条件も次第に失われるようになったのであります。

それでは、「バブル経済」の崩壊によって、日本の経済実体の構造に根本的な変化が生じたかと言いますと、私はそうは見えておりません。世界政治の多極化と経済のグローバル化の趨勢が強化され、未曾有の科学技術イノベーション（革新）を経験しつつある背景のもとで、日本は世界における激しい競争と厳しいチャレンジに直面して、今や苦痛の中で新しい状況下の活路を求めざるを得なくなっている、と私は見えています。

### 経済評論家 発展する中国企業との共生探れ

こうした状況の中で、日本には一部ではありますが、中国が日本も含めて世界各国の投資を吸収し、大きな生産拠点となりつつあるのを目の当たりにし、また、中国の安価な賃金を目当てに、日本企業が中国での工場設置を早めているのを見て、日本を産業空洞化の危機に陥らせ、ゆくゆくは中国との競争で日本が負けることになる、と見ている人がいます。

前にも、日本には「将来、中国は日本の機械、プラントなどを輸入し、技術導入などを積極的にい」、「工業水準が上がったあかつきには、品質優良にして低価格の中国工業生産物が日本産業界を圧迫することになる」という見方がありました。

しかし、今年1月7日の『朝日新聞』は「日中は30年後を見据えて」と題する社説を掲げ、異なる見解を示して次のように述べています。

「（中国経済の発展によって）そうなるのは当然のことであって、わが国はそのような将来に対して今から産業構造面においても、頭脳集約産業育成においてもそれに対処し得る政策を考えてゆかねばならない」

また、「最近まで日本人は、中国の遅れた部分を見て、まだ大丈夫だと思いがっていたのではない。中国の発展は歴史の必然であるし、隣国として喜ばしいことだ。発展する中国と

共存共栄できる道を探さなければならない」と。

経済評論家の尾崎春生氏は今年2月に発行された月刊誌に次のように書いています。

「WTO加盟でさらなる競争力をつけることが確実な中国に対し日本企業が今なすべきことは何か。いたずらに中国脅威論に怯える前にまず、企業のグローバル戦略における中国の位置付けを明確にし、中国企業との共生を探る以外にないであろう。そのことが国内産業の競争力を向上させる結果にもなるのだ」（『文藝春秋』平成14年2月号）と。

また、日本政府財務省の財務総合政策研究所は、今年6月24日、アジアの経済の現状と日本の経済への影響をまとめた報告書を発表し、その中で、中国からの輸入は日本の国内総生産（GDP）の1%を占めるにすぎないとし、中国経済が日本に及ぼす影響は限定的で「脅威論」は一面的な見方でしかない、と真っ向から「脅威論」に反対する立場を取り、中国の経済発展を有効に活用すべきだ、と提言しています。

### アジア地域の協力拡大へ――

日本経済の高度成長がかって日本だけでなく、ほかの国にもプラスになり、相互の経済協力拡大のチャンスを与えたのと同じように、中国経済の発展も中国にプラスになるだけでなく、日本や周辺諸国にも積極的な役割を果たすにちがいません。

今後、中日両国は一層経済協力を強め、しかも協力の視野を2国間からさらに東南アジア、東北アジアへと地域協力の拡大を図ることがますます重要になってきています。

したがって、お互いに警戒するのではなく、相補う、相互補完の関係をつくっていくことが重要ではないかと思えます。そうしてこそはじめて、中日両国の共同繁栄が図られ、アジア・太平洋地域の平和と発展が保証されるのです。

第4に、中日友好事業の後継者を育てることが差し迫って重要になってきております。

中日友好事業は、今、新旧世代の交代期にさしかかっており、中国も日本も後継者の育成に力を注がなければならないということを、真剣になって考えるようになりました。今後の中日友好事業の中で、両国人民、とりわけ若者たちの間に、どんな厳しい試練にも耐えられるような、しかも「情」に重きを置いた人間関係を築くことがきわめて重要だと考えます。

ここまでお話しして、ある一つのことを思い出しました。今から40数年前の55年12月、私は中国の有名な学者郭沫若氏のひきいる中国科学代表団の通訳を仰せつかり、随行して日本を訪問しました。その時、郭沫若先生は、北鎌倉まで足を運び、岩波書店の創立者・岩波茂雄氏のお墓に詣でたいと言いつたのです。

当時の私には、郭先生がなぜこのようなことをされるのか、まったく理解できませんでした。

ご存じのように、郭沫若先生は若いころ、日本に留学し、帰国してから、旧政権の迫害を受けて、20年代に日本に亡命し、千葉の市川に住み着きました。

37年7月、日本軍による中国への全面侵略の始まった盧溝橋事変が勃発すると、郭先生は民族解放闘争に身を投ずるため、救国のため、単身日本を脱出して、中国に帰りました。日本に残された奥さんと5人の子どもは政治的迫害を受け、経済的にも非常に苦しい状態に置かれました。奥さんが憲兵に連行され、一家がどうにもならなくなった時、岩波茂雄氏は市川に一家を訪ね、郭先生の長男に対して一家の生計費と子どもの学費を負担すると言いました。当時では、これは大変なことだったのです。「非国民」とか「売国奴」とか、あるいは「敵に内通する」という罪を被る可能性もあったわけです。しかし、岩波氏は少しもためらわず、それを実行したのです。

### 郭沫若先生——日本の恩人の墓前で平和祈る

惜しいことに、岩波茂雄氏は、新中国が生まれる3年前の46年に亡くなりました。郭沫若先生にとって岩波氏はいわば一度も会ったことのない恩人であり、郭先生は18年ぶりの日本訪問の機会に、恩人のお墓参りを申し出たのです。

東慶寺でお墓参りを済ませた後、寺の一室に通された郭先生に岩波家の人がお礼の言葉を述べると、郭先生も日本の習慣に従い、正座し直して丁重にこう言いました。

「岩波茂雄先生には、ご生前お目にかかることはありませんでしたが、いろいろとお世話になり大変感謝しております。18年前、私は家族を日本に残し、ただ一人で中国へ帰りましたが、岩波先生は私の子どもに費用を出して教育を受けさせてくださいました。現在、二人の子どもは大学を卒業して、長男は研究員として大連化学物理研究所に勤めています。次男は上海で勤めています。岩波先生にはなんとお礼を申し上げたらよいか」

そう言って、郭先生は筆をとり、色紙に次のような詩をしたためたのです。

生前未遂識荊願（生前未だ遂げず識荊の願い）

逝後空余掛劍情（逝後空しく余す掛劍の情）

為祈和平三脱帽（和平を祈らんがために三たび脱帽す）

望将冥福裕後昆（望むらくは冥福をもって後昆を裕かならしめん）

「識荊」とは、待望の人に初めて会うことをいう成語ですが、郭先生は岩波氏の生前に「識荊」の願いを遂げられなかったことを嘆いて「生前未だ遂げず識荊の願い」と詠み、つづいて、「掛劍」の故事を引用して、「逝後空しく余す掛劍の情」としたため、岩波先生に会ってお礼を申し上げたかったのに、先生はすでに亡くなられた、その無念さを詠んだのです。

「掛劍」の故事の出典は、『史記』と『蒙求』です。春秋時代、呉の王子季札は、使者として魯の国へ行く途中、徐の国に立ち寄りました。徐の君主は季札の剣を見て、欲しいと思いましたが、口に出して言えませんでした。季札にはその気持ちがよく分かりましたが、使者として諸国を歴訪するのに剣を外すわけにはいかず、そのまま立ち去りました。そして帰国するとき、剣を進呈しようと徐の国を訪ねましたが、徐の君主はすでに亡くなっていました。

そこで季札は剣を徐の君主の墓のそばの木に掛け、心中の誓いを果たし、また徐の君主の願いをかなえてあげたのです。郭沫若先生は、この故事にならい、自分も剣を掛けようと思ったけれども、その願いを果たすことができなかつた。そこで平和を祈るために、岩波氏の墓前で、三度脱帽し、冥福でもって、後昆が、これは子孫のことですが、豊かであり幸せであってほしいと望む詩を詠まれたのです。

私は、この心温まるエピソードは、一般に知られざる中日交流史の貴重な一ページだと思います。このエピソードは人と人との関係がどれほど重要で、また「情」がいかに大切かを物語っています。私は今後、中日両国人民、特に、若い世代の交流の中で、ますます多くの友人関係が築かれていくことを願っています。私たちはお互いに、中日関係の中で重要な役割を果たした先輩たち、池田名誉会長を含めた先輩たちのような“友好人士”を育てるべきだと思います。

このことこそが、中日友好事業を発展させ、真の意味で過去の教訓から未来を切り開き、先達の事業を受け継ぎ将来に道を開くために差し迫って重要なことだと思います。

### 希望の陽光が降り注ぐ時代を

人類の歩みは、すでに21世紀へと踏み出しました。中日関係の将来は、これからの国際関係

の発展を抜きにして見通すことはできません。世界は今、大きな変動期にさしかかっています。国際情勢は総体的に緊張緩和に向かっているとはいえ、冷戦思考はまだ残り、新しい覇権主義が生き延びようとする限り、天下泰平とはまいません。平和と発展は当面だけでなく、これから相当長期にわたって時代のテーマであり続けるでしょう。

今、世界は政治的多極化、経済的グローバリズムの趨勢にあり、さらに科学技術はイノベーションの波に洗われて面貌を一新しようとしています。このような情勢のもとで、世界各国の人々は公正で合理的な国際新秩序の確立を望み、このため不断の努力を積み重ねています。

21世紀における中日関係のキーワードは、平和、発展、友好、協力でなければならず、戦争、対抗、憎悪、反目であってはならないと思います。言い換えれば、中日両国は長期にわたり、安定した健全な友好協力関係を確立し、アジアと世界の平和のために貢献することが要求されております。これは中日両国人民の共通の願いであり、共同の目標と自覚を持って果たすべき責務でもあると確信いたします。

池田大作名誉会長は68年9月のあの有名な演説の中で、日本の青年に向けて、「やがて諸君達が社会の中核となったときには、日本の青年も、中国の青年もともに手を取り合い、明るい世界の建設に笑みを交わしながら働いていけるようであってはいけません。この日本、中国を軸として、アジアのあらゆる民衆が互いに助け合い、守り合っていくようになったときこそ、今日アジアをおおう戦争の残虐と貧困の暗雲が吹き払われ、希望と幸せの陽光が、燦々と降り注ぐ時代である」と、呼びかけられました。

どうか皆さん、この目標に向かって、互いに手を取り合い、ともに努力し奮闘しようではありませんか（大拍手）。